

Title	Small Clause と補部選択
Author(s)	梅原, 大輔
Citation	Osaka Literary Review. 26 P.13-P.26
Issue Date	1987-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25508
DOI	10.18910/25508
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Small Clause と補部選択

梅原大輔

0. 本論ではいわゆる「小節 (Small Clause 以下 SC と略す)」の構造について考察を加える。

SC を含むとされる典型的な構文は次のようなものである。

- (1) a. Bill *seems sick*.
b. I consider *John honest*.

これらの斜体字の部分がどのような構造をなしているかという点について、生成文法の枠組みのなかで大きく二つの異なる分析が提案されている。

一つは Stowell (1981, 1982/83) などに示されている分析で、斜体字部分を単一の構成素、すなわち SC と見るものである。この分析では (1a) の *seem* の補部は主語 *Bill* が NP 移動の後に残した痕跡と述部 *sick* からなる SC であり、その範疇は *sick* の投射である AP とされる。このような分析を SC 分析と呼ぶ。

これに対して Williams (1980, 1983) などは SC は構成素をなしていないと主張し、(1b) の *John* と *honest* の間に見られるような主述関係は述語理論 (Predication Theory) と呼ばれる同一指標付与規則によって導かれるとした。このような分析を述語分析 (以後 PD 分析) と呼んで SC 分析と区別する。

以上の二つの大きな分析の他に、同じ SC 分析の中でも SC の範疇が何であるのかという点をめぐって様々な提案がなされている。本論ではこれらの議論を踏まえつつ、SC は、その述部の投射であることを主張する。また SC は主語と述部を持ってはいても命題としては解釈されないことを明らかにし、SC が S であるとする分析に反論を加えたい。そして、その

ように仮定された構造が文法の他の一般原則とどのように整合していくかを主として θ 理論、格理論との関連で見えていくことにする。

1.1. まず SC 分析と PD 分析のどちらの立場で議論を進めていくかを明らかにせねばならない。結論から言えば、特に投射原理との関連からして少なくともある種の SC は一つの構成素であると考えるのが妥当なように思われる。

(1a) の動詞 *seem* は一つの内項にのみ θ 役割を与える一項動詞であることが知られている。Stowell の分析によると (1a) の D 構造は次のようなものとなる。

(2) [e] seem [Bill sick] AP

動詞 *seem* は目的語に格を与えないので、このままでは SC の主語 *Bill* は格フィルター¹⁾によって排除されてしまう。そこで、この主語 NP は格を受けるために、空である主節の主語位置へ移動する。つまり SC の主語に対しても NP 移動が適用されるという考え方である。このような基底構造と派生の方法を仮定するなら、*seem* の θ 役割は D 構造から LF に至る派生のすべての段階で一貫して補部 AP に与えられることになり、投射原理 (Projection Principle)²⁾ は満たされる。

一方 PD 分析に立てば (1a) の D 構造は S 構造と同じ形をしていることになる。*Bill* と *sick* は S 構造から LF に至る過程で述語規則によって、同一指標を付与され、従って LF で「節」と解釈されることになる。しかし、もし Williams の言うように同一指標付与が S 構造から LF への派生の段階でなされるとするなら、LF ではともかく D 構造や S 構造では *Bill* と *sick* とはばらばらの要素として存在していることになる。*Seem* を一項動詞とするなら主語 NP には θ 役割が与えられず θ 基準³⁾ に反することになる。主語 NP には形容詞 *sick* によって θ 役割が与えられると仮定しても、同一指標が付与される以前には両者を適切に結び付ける手立てがないのだからこの θ 付与は保証されない。この理由から我々は少なくとも (1) の文

に現われているような SC は一つの構成素であるとの立場に立って議論を進めていくことにする。⁴⁾

1.2. Stowell の分析では (1b) の補部の構造は次に見るように最大投射内に主語を持った AP となる。

(3) I consider [AP John [A' honest]].

彼がこのような構造を仮定したのは X-bar 理論を通範疇的に一般化しようとしたためである。通常 NP と S 以外の範疇は投射内に主語を持たないとされるが、それは主語 NP への格付与が保証されないためであり、もし SC のように外部から格が与えられるような環境であれば、全ての範疇は主語を持つことができるとした。

しかしながら実際の分析は Stowell のこのような一般化が不適切なものであることを示している。なぜなら (3) の中で A' とされている SC 述部を支配する節点は明らかに最大投射であるという証拠があるからだ。

例えば *wh* 移動は最大投射以外の要素を動かさないということが知られているが SC の述部には *wh* 移動は適用可能である。

(4) a. *What do you like Jane's [N' t]?

b. How sarcastic do you consider John t?

また X' の外部にあるとされる要素が SC の述部には出現することができる。もっとも明白な例は SC の述部が NP であるような場合である。次の例では SC の述部に限定詞や関係詞節を伴った完全な NP が現われている。

(5) a. I consider Mary Bill's lover.

b. I consider John a man who will never yield.

以上の例を考えれば、SC を (6a) ではなく、むしろ (6b) のように考える必要があるとわかる。

(6) a. [XP NP [X' X]]

b. [α NP [XP X]]

そこで問題は (6b) において α の範疇は何かという点に移る。 α の可能性として考えられるのは S であるか XP であるかのいずれかであろう。S であると分析すれば SC はまさしく「節」ということになり、基本的には時制節や不定詞節と違いのないことになる。XP であるとの分析をとれば、SC はその述部の投射であるという Stowell の考え方を受け継ぐことになる。ただし、そのような構造を基底で生成するためには $XP \rightarrow \dots XP$ といったバーの数が減らないような書き換えを許すように X-bar 理論の式型を修正しなければならないだろう。⁵⁾

SC が S なのか述部の投射なのかを決めるにあたって、次のような例から見ていくことにする。

- (7) a. I consider that John is honest.
b. I consider John honest.

このように思考動詞の補部が時制節であるか SC であるかによって意味に違いがでてくることが知られている。一般に *that* 節をとる場合には補文命題に客観性があるのに対し、SC の場合には補文の内容が主観的、直接的知覚を表すとされている。この両者の違いは *consider* のような思考動詞を見ている限り漠然としたもののように思えるが、知覚動詞を用いた同様の例を見れば歴然としていることがわかるだろう。

- (8) a. I heard that Mary cried.
b. I heard Mary cry.

時制節をとる a. の場合は *Mary* が泣いたという話を聞いた (従って、*Mary* が泣くのを直接聞いてはいない) のに対して、b. の場合は *Mary* が泣くのを聞いたという意味で直接的な知覚を表しているといえる。

このような意味の違いを何に帰すべきだろうか。一つの考え方は *that* 節も SC も共に S であるとした上で、その定性、不定性といった意味の違いによって主観性の差が生じるとするものだろう。しかしながら筆者は両者の違いは構造自体の違いとして説明されるのが自然だと考える。つまり

(8a) の場合、主語 I が聞いたのは「*Mary* が泣いたこと」という命題なのに対し、(8b) では *Mary* の泣き声であって、決して命題ではない。別の言い方をすれば、(8a) の場合、動詞が補部に与えている θ 役割は Proposition であるが (8b) の場合はそうではない。そこで我々は (8b) において *hear* が目的語として選択しているのは *cry* という動語句であり、*Mary* は *cry* が主語 (= 外項) として要求しているだけで、主動詞とは無関係であると考えよう。そうすると (8b) の構造は次のようなものとなる。

(9) I heard [vp Mary [vp cry]].

このように SC が S ではなく、述部の投射であることを支持するいくつかの事実がある。

第一に SC には相は現れることができない。

- (10) a. *I heard her have cried.
b. *I heard her be crying.

Chomsky (1985, 1986), Stowell (1981) など、最近の生成文法の議論の中では S は INFL の最大投射であるとされることが多い。それが正しいとするなら相を持たない SC は INFL を持たないことになり、S とは考えられなくなる。X-bar 理論の一般式型は全ての最大投射は必ず主要部を持つ内心構造であることを要求するからである。

また SC の述部と主動詞との間に見られる選択関係も通常の S の場合には見られないものである。

- (11) a. I hear that John is angry.
b. *I hear John angry.
c. I hear that John is in China.
d. *I hear John in China.

これらは主動詞と SC との間に範疇的 (あるいは意味的) 選択関係があると考えれば説明できる。簡単に言えば *hear* の目的語になることができるのは「聞くことができるもの」だけである。That 節 (Chomsky (1986) の

枠組みでは CP) が選択されれば「聞くことのできるもの」とは命題全体つまり「うわさ」となり、その節内の述部のみが意味的に主動詞によって選択を受けることはない。しかし VP や NP が選択された時には、それらは「聞くことのできるもの」でなければならず、必然的に動詞との間に意味的な選択関係が生じる。これは SC が S ではなく、述部の投射であるという強い根拠になる。

以上と同様のことが、思考動詞についても言えるかどうか調べてみることにしよう。

動詞 *seem* は不定詞節と SC の両方をとることができるが、その分布には、やはり違いがあることが観察されている。

(12) a. Although I never got to see him, John seemed to be fat.

b. *Although I never got to see him, John seemed fat.

(Todrys 1980: p. 345)

(12) は不定詞節と SC の間には知覚動詞の場合と同じく対象認識の直接性について差があることを示している。(12b) のように *seem* の補部の内容が直接に観察可能でないときは *to be* を省略することはできないのである。

また、次の例は主動詞と SC の間に意味的な選択関係が見られることを示している。

(13) a. His nationality seems to be American.

b. *His nationality seems British.

c. His nationality seems irrelevant.

d. The meat seems to be labeled.

e. *The meat seems labeled.

f. The meat seems done.

(Bolinger 1972: p. 77-78)

Bolinger は *seem* が直接にとることのできる形容詞は程度を表すものに限られるとしている。不定詞節の場合には、そのような制限が見られないことから考えれば、やはり SC はその述部の投射であって、命題とは解釈

されず、従って主動詞との間に選択関係があるのだと言えるだろう。

Expect を含んだ次の例も同様のことを示している。

- (14) a. I expect there to be a locker key on my desk.
 b. *I expect there a locker key on my desk.

Expect は名詞を補部に選択することができない。(14a)が文法的であるのは *expect* の対象になっているのが命題だからであり、逆に (14b) が非文法的なのは *expect* の対象が NP になっているからである。

2. 以上の議論を踏まえれば少なくとも知覚動詞や思考動詞の補部に現われる SC は次のような構造をしていると結論付けられる。

- (15) [XP NP [XP X]]

このような構造を仮定した場合、文法の他の一般原則との整合性がどのように得られるかを以下で調べていくことにする。

2.1. 下位範疇化に関する理論および θ 理論に関して (15) のような SC の構造が主張するのは次の各点である。

- (16) i) 主動詞は統語範疇 XP によって、下位範疇化される。
 ii) 主動詞は XP に対して θ 役割を与える。
 iii) XP は Proposition ではない。
 iv) XP はそれぞれの範疇の一般的な性質に従い外項を要求する。
 外項に対して θ 役割を与えるかどうかはそれぞれの語の語彙的特性に従う。
 v) XP の外項は主動詞に隣接して格付与される。

このうち i)–iii) の各点については前節で、すでに触れたので、ここでは iv) を中心に見ていくことにしよう。

i)–iii) より、主動詞と SC の主語との間には直接の θ 関係は存在しないことがわかる。言うなれば、主動詞は SC に主語があるとか、ないとかいうことは問題にせず XP を選択するのであって、当然そういった XP に

は命題としての解釈は与えられない。SC が主語を持つのは述部 XP が外項を要求するためであって、常に XP 側からの問題として捕らえられなければならない。

では外項 (=主語) を要求する範疇 X とは何だろうか。まず、AP は常に外項として名詞をとることが知られている。叙述的な用法であればそれは NP であり、限定的な用法の場合にはおそらく N' であろう。

VP も述語として用いられる範疇であり、外項を要求すると考えて問題はない。もちろん *seem, rain* のように外項に対して θ 役割を与えない動詞も存在するが、それは個別的な語彙特性の問題であり、外項=主語をとらないということではない。そのような動詞の場合 θ 役割を持たない冗言的 *it* を主語としてとることになる。全ての VP が常に外項を要求するとすれば SC に冗言的 *it* が出現しても何ら不思議はない。

- (17) a. I prefer *(it) hot in summer.
 b. I consider *(it) unlikely that he will win.
 c. *its hotness (冗言的 *it* の解釈で)
 d. *its unlikeliness that he will win.

(Kitagawa 1985: p. 213)

Kitagawa (1985) は冗言的 *it* は S 内にしか現われず NP 内には許されないことから、冗言的 *it* が出現できる SC は S の資格を持つと述べた。しかし、我々のこれまでの議論を踏まえれば (17) の事実はただちに SC が S であるとの証拠にはならない。NP の内部に冗言的 *it* が、現われないのは NP の主語は他の範疇の主語とは異なって、最大投射の内部に位置するためであり、これは外項としての主語とは違い、常に要求されるわけではないのである。一般に NP はその範疇特性として外項をとらないことが知られており、それ故名詞化とは全ての外項を内項化する操作であるとも考えられている。⁶⁾

最後に残った PP についても外項を要求すると考えておく。PP は形容詞的な用法の他に副詞的に用いられたり、主語として用いられたりもする

が、少なくとも SC に関連したここでの議論では外項を義務的に要求すると考えて差し支えないものと思われる。

結局 (16iv) との関連で、我々は外項を要求する範疇は NP を除く他の全ての主要範疇であると結論付けることにする。従って、次のように主動詞によって選択され θ 付与される XP のうち、NP 以外は主語なしでは許されない。

- (18) a. I heard the radio.
b. *I heard cry.

しかし (18b) において *cry* の外項はなぜ主節の *I* であるとは考えられないのだろうか。SC 述部の主語は、必ず (15) の NP の位置に現われていなければならないのだろうか。

- (19) a. I want Max dead.
b. I want to be dead.
c. *I want dead.

(19c) において AP *dead* が外項として主節主語 *I* を選択することはなぜできないのであろうか。

一つの可能性として (19c) の S 構造は SC に PRO を含んだ次のようなものと考えることができる。

- (20) I want [AP PRO [AP dead]].

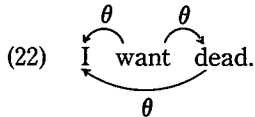
ここで PRO の位置は AP によって cover はされているが include はされていない。⁷⁾ この時 *want* と PRO の間にある AP は統率の障壁にはならず、従って PRO は主動詞によって統率を受けることになってしまう。このため (19c) は非文法的となる。

この考えをとるなら外項を必要とする XP は必ず (15) の NP の位置に主語をとるという一般化をすることになるが、これは必ずしも望ましいものではない。次のような例を見る限り XP の外項は XP に付加された位置には現われていないからである。

- (21) a. [IP John doesn't [VP like linguistics]].
 b. [IP David is always [AP hungry]].
 c. [[NP difficult] questions].

(21a) では VP の外項は IP に支配される位置にあり, (21b) (21c) ではそれぞれ AP の外項は IP, NP に支配される位置にある。きわめて一般的なこれらの例を見れば (15) の NP 位置への主語の出現は義務的ではないと考えるのが自然である。すると (19c) の構造が PRO を持つという根拠もなくなり, この非文法性は他の原因に帰せられることとなる。

(19c) の基底構造が表面形と同じであるとするなら, その場合の θ 関係は次のようになる。



Williams (1983) は PD 分析の視点から (22) のような三つ巴の θ 関係を主題的独立性 (Thematic Independence) に反するものとして排除することを提案している。⁸⁾ 我々の枠組みにおいてもやはり同様の制約を設定するのが望ましいと思われる。

2.2. 続いて SC と格理論との関連を見ていこう。これまでの議論を踏まえるなら次のように述部に NP を持つ SC は大きな問題を投げかけることがわかる。

- (23) a. I consider John an honest man.
 b. Jane called me a coward.
 c. *Bill seems a gentleman.

NP はその一般的特性として外項を要求しないことはすでに述べた。(23) の各文で主動詞が選択しているものが SC 述部の NP であるとするなら, SC の主語である NP は何の項でもないことになる。これは θ 基準から考えて望ましい結果ではない。

(23) のような構文は格理論との関連からも興味深い問題を提示する。これらの文には2つのNPが含まれているが、両者は常に同じ格を持つことが観察される。例えば、名詞が形態的な格を持つドイツ語の例を見てみよう。

- (24) a. Er hat mich einen Beertüger geschimpft.
 He has me (ACC) a deceiver (ACC) called.
 b. Ich bin von ihm ein Betrüger geschimpft worden.
 I am by him a deceiver (Nom) called been.

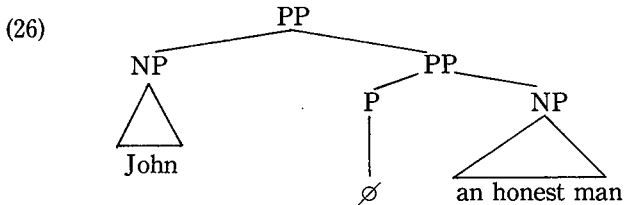
(24a) では *einen Betrüger* は *mich* と同じく対格を受けているが、*mich* が NP 移動を受けて主格を受けるとなると、*ein Betrüger* にも主格が与えられる。これは2つのNPの間には格の受け渡しがあることを示している。この受け渡しには方向性があり、SC 主語のNPからSC 述部のNPへの受け渡しはできても、その逆は許されないようである。

- (25) a. John is considered t an honest man.
 b. *An honest man is considered John.

(25b) の *John* は受動分詞 *considered* からは格付与されないが、主格を持っている *an honest man* (あるいはその痕跡) からも格を受け継いでおらず、結果として格フィルターに反している。

このようなNP間の格の受け渡しは他に2つの環境で観察される。一つは *be* 動詞など繫辞によって結ばれているNPの間であり、もう一つは前置詞 *as* の目的語とそれに先行するNPとの間である。*As* は前置詞でありながら目的語に直接格を付与せず、先行するNPの格を目的語に受け渡すことが、ドイツ語の *als* の観察からも確かめられる。このため Emonds (1985) は *as* のことを *be* 動詞に対応する前置詞として前置詞的繫辞 (Prepositional Copula) と位置付けている。⁹⁾

そこで我々はNP 述部をとるSCの問題点に対する解答として次のように空の前置詞的繫辞を主要部とする構造を仮定しよう。



この構造において *John* は PP によって要求される外項であり、2つの NP の間には *as* 句の場合と同じような格の受け渡しがなされることができると考えることができる。

この仮定を支持するように、NP を述部にとる SC は多くの場合 *as* またはそれに相当する前置詞の出現する形を許している。

(27) I consider John as an honest man.

(28) a. We elected John chairman.
b. We elected John as chairman.

(29) a. Bill seems a gentleman.
b. Bill seems like a gentleman.

(30) a. Why did you choose him president?
b. Why did you choose him as president?

3. これまでの議論のまとめとして、(1) の文にある2つの動詞の補部選択を記述してみる。

(31) seem

CP: It seems that John is a coward.

IP: John seems to be a coward.

AP: John seems sick.

PP: Bill seems an anarchist.

John seems like a gentleman.

*NP: * It seems a gentleman.

* A gentleman seems.

*VP: * John seems come back soon.

(32) consider

CP: I consider that John is stingy.

IP: I consider John to be stingy.

AP: I consider John stingy.

PP: I consider John (as) a hot-shot.

NP: Let's consider his proposal.

*VP: *I consider John help me.

このような範疇選択の他に意味的な選択制限が加えられて、(13)のように意味的に不適格な文は排除されることになる。

以上、本論の分析は主述関係を含んだ構成素が必ずしも命題 (=節) と解釈されるわけではないことを明らかにした点で、意味があるものと考えられる。今後、動詞との θ 関係を持たない SC も含めて更に研究する必要があるだろう。

注

- 1) 「音形を持つ全ての NP は格を持たなければならない。」
- 2) 「各語彙項目の θ 表示に関する特性は表示の全てのレベルでレクシコンから投射される」
- 3) 「各々の θ 役割は必ず一つの項に与えられ、各々の項は必ず一つの θ 役割を与えられる」
- 4) SC を一つの構成素とするその他の議論については Safir (1983), Beukema-Hoekstra (1984), Ushie (1986) などを参照。
- 5) パーの数が減らないような X-bar 理論の展開規則を仮定するのは特に無理なことではないと考えられる。NP 内における複数の形容詞の修飾は N' の循環を引き起こすであろう。
- 6) Williams (1981)
- 7) (i) ... θ ... [$\gamma\beta[\gamma...t...]$]
の構造において、 γ は t を include し、 β を cover し、 θ を exclude するといふ。Chomsky (1987)
- 8) この文は主語が複数の θ 役割を受けて θ 基準に反するため排除されるのではない。SC 主語に PRO を認めない分析では主題的独立性という概念のもとに θ 基準を修正することになる。例えば、次の文は主語が複数の θ 役割を受けているが、*arrive* と *dead* が θ 関係を持っていないので適格となる。

(i) John arrived dead.

- 9) *as* の他に Emonds (1985) は, *become* に対応する意味を持つ前置詞的繫辞として *into* を挙げている。

参 考 文 献

- Beukema, F. and T. Hoekstra (1984). "Extractions from With-Constructions." *LIn*, 15, 689-698.
- Bolinger, D. (1972). *Degree Words*. Mouton.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- _____. (1985). *Knowledge of Language*. Praeger.
- _____. (1986). *Barriers*. MIT Press.
- _____. (1987). *Seminar with Specialists in Commemoration of the 40th Anniversary of the Kyoto University of Foreign Studies*.
- Emonds, J. (1985). *A Unified Theory of Syntactic Categories*. Foris.
- Kitagawa, V. (1985). "Small but Clausal." *CLS* 21, 210-220.
- Safir, K. (1983). "On Small Clauses as Constituents." *LIn*, 14, 730-735.
- Stowell, T. (1981). "Origines of Phrase Structure." Ph. D. dissertation, MIT.
- _____. (1982/83). "Subjects across Categories." *LR*, 2, 285-312.
- Todrys, K. (1980). "Grafting in a Theory of Derived Structure." *CLS* 16, 342-56.
- Ushie, K. (1986). "X-bar 理論における S と主語." ELSJ Symposium, at Tsudajuku Univ.
- Williams, E. (1980). "Predication." *LIn*, 11 203-238.
- _____. (1981). "Argument Structure and Morphology." *LR*, 1, 81-114.
- _____. (1983). "Against Small Clauses." *LIn*, 14, 287-308.